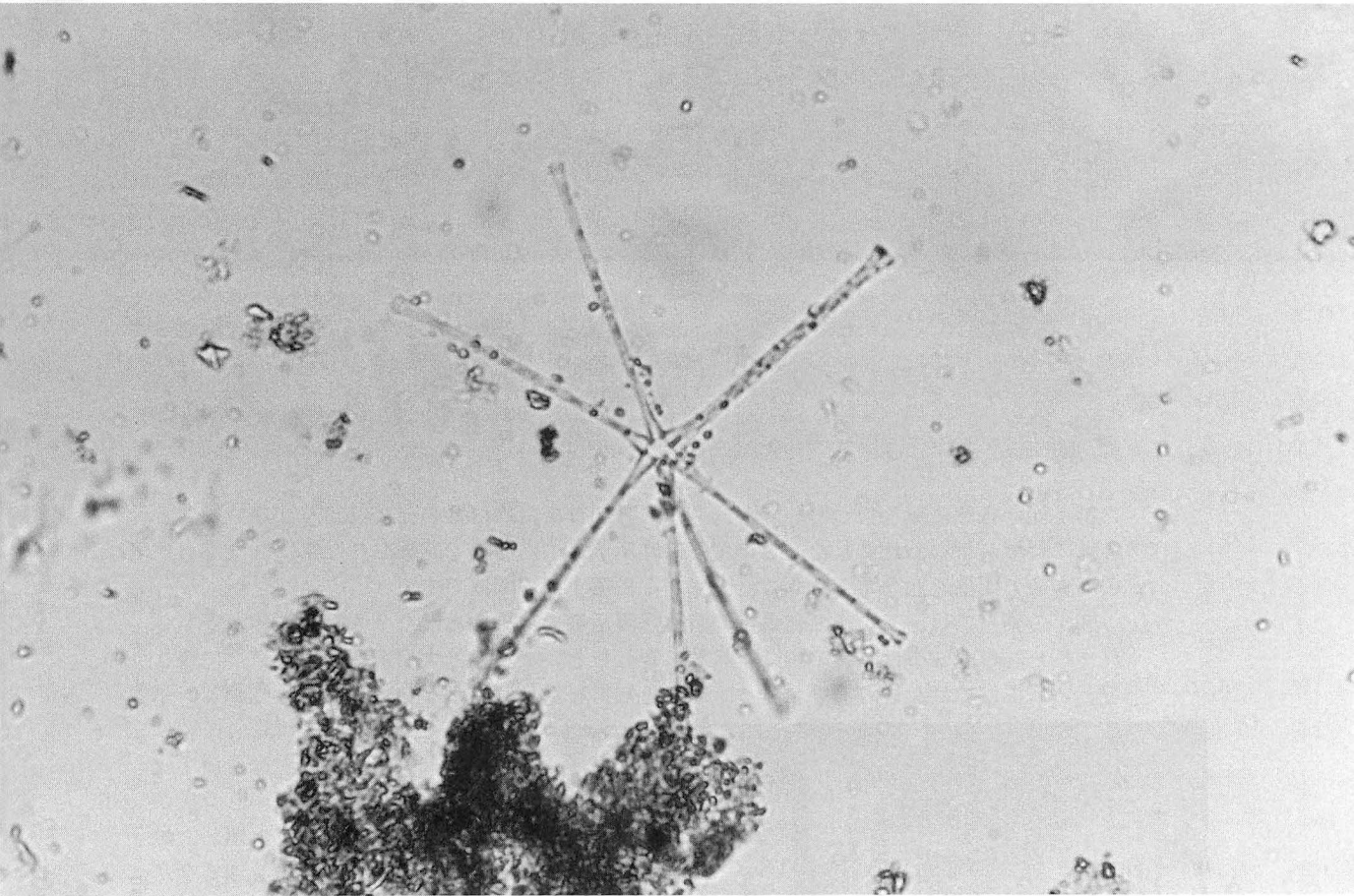


石川県白山自然保護センター編集

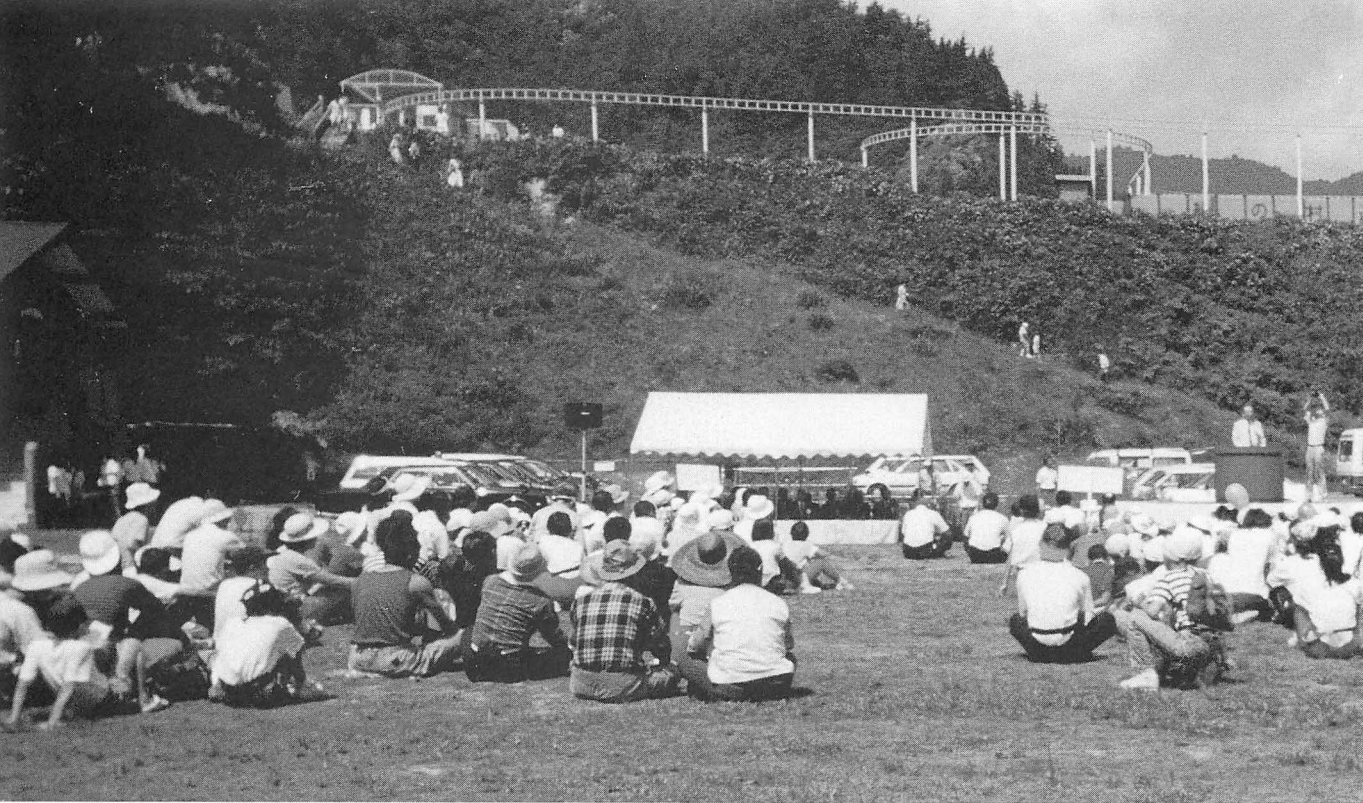
# はくさん

第17巻 第2号



## ホシガタケイソウ

長さが約10ミクロン棒状の珪藻があつまって星のかたちに見えるため、学名も星を意味するアステリオネラとなづけられています。富栄養の水域に発生する珪藻で、手取川ダム湖では貯水後の昭和55年9月、57年4月、59年6月に優占種になっています。この珪藻が、異常繁殖したところでは異臭、ろ過障害、着色などの害がおこったとの報告がありますが、手取川ダム湖では現在の水質状態は中栄養の状態にあり異常繁殖の心配はないでしょう。



# 自然に親

第1回「自然に親しむつどい」が、さる8月20日に白峰村緑の村に400人が集い式典と各種の行事が行なわれました。この催しは昨年7月に内浦町で開催された第30回全国自然公園大会の開催を記念するもので、今年がその第1回の開催です。

今年の集いでは、これまでに県内の自然保護活動で功績のあった2人と2団体が表彰されました。中西知事は挨拶の中で「自然に親しむということは大切であるが、自然に親しむという程度ではなまぬるい、もっと自然を知らなければならない。」ことを強調し、来



年度以降もこの行事を推進してゆくことを宣言しました。記念講演では東京在住の漫画家ヒサクニヒコ氏が「白峰村の自然と恐竜」と題し、黒板にお得意の漫画で解説を加えながら恐竜の絶滅と哺乳類と人類の繁栄について講演されました。また、つどいの広場では、紙すき、手作り絵はがきづくり、バードカービングの実演指導が行なわれ、多くの人々が白山の思い出を絵葉書に託しました。午後からは、白山登山、たんけん

緑陰教室



# しむつどい

オリエンテーリング、クイズ観察会、サバイバル講座、チャレンジ登山が行なわれ、それぞれ自然に触れ、学び、親しんだ一日を過ごしました。

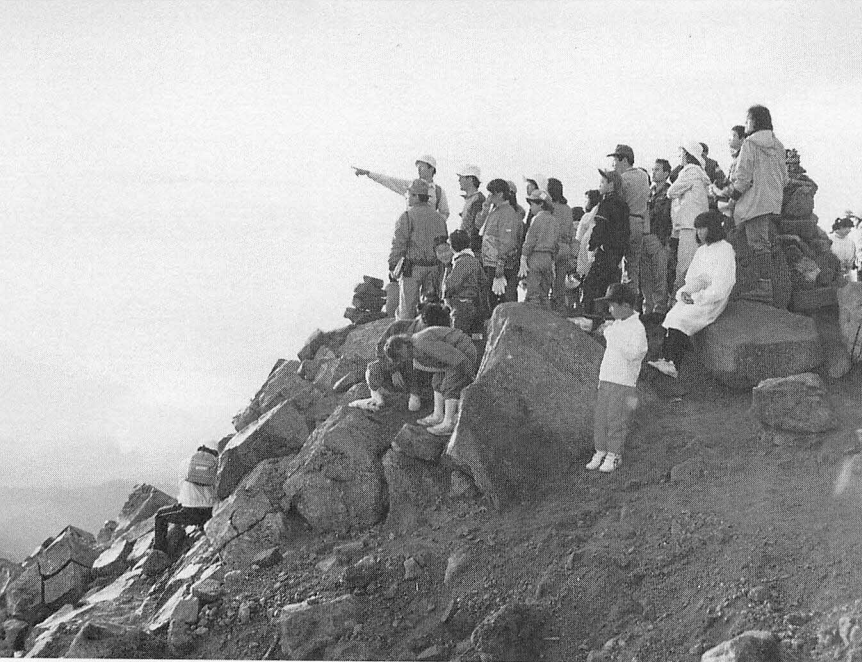
## 自然保護功労者の横顔

**西山喜一氏** 石川郡吉野谷村。昭和20年生。旅館業。自然公園指導員として17年間、白山国立公園利用者へ自然保護思想の普及に努めた。

**山田健治氏** 石川郡白峰村。昭和20年生。地方公務員。自然公園指導員として17年間ごみの持ち帰り運動や登山施設の保守点検等に尽力した。

**白峰村ブナの会（代表 織田捷二）** 白峰村を中心に会員数約50名。白山の自然保護に関する講演会や研究会を開催。

**新竪校下少年連盟（連盟長 宮口優。少年委員長 若山昌周）** 永年にわたり犀川の美化清掃に取り組んできた。



### 白山登山

山頂での眺望は良く遠く  
北アルプスが見えた

## 白山登山

小学校1年生から、最高齢は62歳の男性まで合計65人が、別当出合からその日の宿泊地南竜山荘を目指しました。翌日は展望歩道を通り山頂をきわめ、砂防新道を下山しました。今年の白山は例年と比べると2週間ほど高山植物の開花が遅く、やっとさかりを過ぎたばかりの白山の高山植物の花々の見事さに疲れも忘れて登りました。なかには遠く群馬県から参加した人もあり、白山の素晴らしさに来年もまた参加したいという感想でした。

## クイズ観察会

市ノ瀬キャンプ場周辺の観察路を使って、植物と昆虫の専門ナチュラリスト2名の指導のもとに行われました。クイズの質問に答えてゆくと、日頃、なに気なく見過ごしている草木や昆虫やひっそりとしていた自然が急ににぎやかに見えてきました。ハクサンアザミの枝先にびっしりと付いたアザミヒゲナガアブラムシにまず驚き、そのアブラムシを良く観察すると腹から子虫を産んでいるようすが見られました。また、たった20センチ四方の広さに12種類の草が生えていることもわかりました。最後に答えあわせをし、解答用紙に採点をしました。中には100点満点を取った女の子もいました。



### クイズ観察会

「川の瀬と淵ではどちらが水生昆虫の種類が多いでしょうか？」



チャレンジ登山  
地図と磁石をたよりに有形山山頂へ

## チャレンジ登山

1010.7mの有形山山頂をめざすのが、その日のチャレンジでした。登山口まではバスと自動車を乗り継いで行きました。小学生から70歳の人まで、家族連れやボーイスカウトも参加していました。道は頂上近くまでは、発電所からの送電線の巡視路がありますが、山頂へは登山道がなく、やっと踏みあとと道を見つけて、ヤブをかきわけ山頂を目指しました。途中見晴らしの良いところでは白峰村の家々が良く見渡せましたが、山頂はまったくのヤブの中で眺望は悪く、三角点の説明を聞き、各自記念撮影をして、山を降りました。

## サバイバル講座

小松市の冒険家や金沢市の山岳会の指導で、道のない山の登りかた、ナイフの使い方、川の渡り方などを学ぶのがこの日の講座でした。急な斜面を登るときには、生きた草の根元をつかみながら登るコツを教えられ、道のないところでは川の中も歩きました。途中の急斜面では立ち往生をしながらも全員が登りきりました。すこし休んだあと、木のぼりの練習をし、最後は木のあいだにロープを張り渡し、滑車を使ってのロープ下りです。滑車に取り付けたロープをしっかりと握り締め、一気に風を切って滑り降りました。汗をかきながらも子供達は、つかの間の冒険家気分を味わいました。



サバイバル講座  
「どこまで登れるか、やってみよう」

## たんけんオリエンテーリング

会場の緑の村から続く散策路を一週し、途中に設けてあるポストにはいろいろな問題があり、早さと解答の正確さを競いました。草っ原には望遠鏡があり、「むこうの林のふちにいる動物は何でしょう」という問題がありました。望遠鏡で林のほうを探しましたが、望遠鏡を使うのは今日がはじめてという人がほとんどで、最初はどこを見ているのかも分かりません。「キャー」「クマー」。みんな大騒ぎ。でも安心。クマは剝製でした。

たんけんオリエンテーリング  
「お母さん、どこにいるの」  
「ありや……」



# ファミリー登山の山——白山



## ■白山の保護と利用に関する報告書から■

野崎英吉

白山国立公園の保護と利用に関する将来的な方向を検討するため石川県では、昭和62、63年度に登山者に関するアンケート調査を実施し、今春3月にとりまとめられました。ここではこの報告書をもとに白山登山の現況がどうなっているのかを解説いたしましょう。

## 白山国立公園利用者は123万人、 登山者は3万5千人

白山国立公園の利用者数は昭和62年度は123万人でした。白山の最高峰御前峰を目指す人々は年間約3万人とこれまでいわれてきました。この数字は白山室堂と南竜が馬場での宿泊者総数の昭和50年から昭和63年までの平均値29,292人が用いられてきました。しかし登山者がかならずしも宿泊するとは限らず、日帰りの登山者もかなりの割合を占めることは知られていました。けれどもこれまで統計的な数値は把握されていませんでした。

別当出合から御前峰山頂までの標高差は1,442m、最短の砂防新道を通ると距離は6.5km 休憩時間を含めない標準的な所要時間は、登り5時間、下り2時間50分の合

計7時間50分です。日頃ハイキングをして山に慣れている方なら休憩時間を入れてこの時間で歩くことが出来ます。そのため実際に日帰り登山をするひとの数を算出するために昭和62年に別当出合で調査したところ、下山者 3,432人のうち 576 人、16.8%が日帰り登山をしていたことがわかりました。この数値を元に日帰り登山者数を換算すると宿泊者数に20.2%を掛けた数（推定値）が日帰り登山者数になり、日帰り登山者数と宿泊者数を合計した登山者総数は3万1千から4万1千人のあいだで最近14年間の平均は35,209人という数値が出てきました。

## 夏の山頂部は過密地域

白山の登山利用が7月と8月のふた月に集中し、これが山頂部地域での混雑と過度の利用を引き起こしていることはこれまでに何度か指摘されてきました。たとえば、室堂の宿泊定員は750人ですが、昭和58年から昭和62年までのあいだに宿泊定員を上回った日数は合計46日、年平均9.2日と夏山期間のうち天気が安定し、お花畑のきれいな7月20日から8月の15日までの26日間ではほぼ3日に1度は定員オーバーになっていることとなります。この宿泊定員の計算根拠になっているのは一人巾70cmのマットレス1枚の面積ですから、定員の倍で巾35cmに1人ということになります。このような状況を出るだけ緩和するため県では、混雑の予想される7月下旬から8月上旬の週末の利用は出来るだけ控えることや、比較的すいている南竜ガ馬場の南竜山荘の利用を呼び掛けてきました。

また、室堂宿泊者の多くは、宿泊の翌日、山頂で日の出を拝む事をひとつの目的としています。早朝3時半過ぎには、室堂センターの広場で太鼓が打ちならされ、それを合図に人々は起き、山頂を目指します。ところが人が多いと長い人の列ができ、なかなか思うように登れません。また、室堂での宿泊者の多い時には日の出を拝むために多いときには千人ちかくの人々が山頂部に立つこともあり、御前峰の山頂はとても混雑します。

昭和61年—63年室堂・南竜で宿泊定員を超えた日

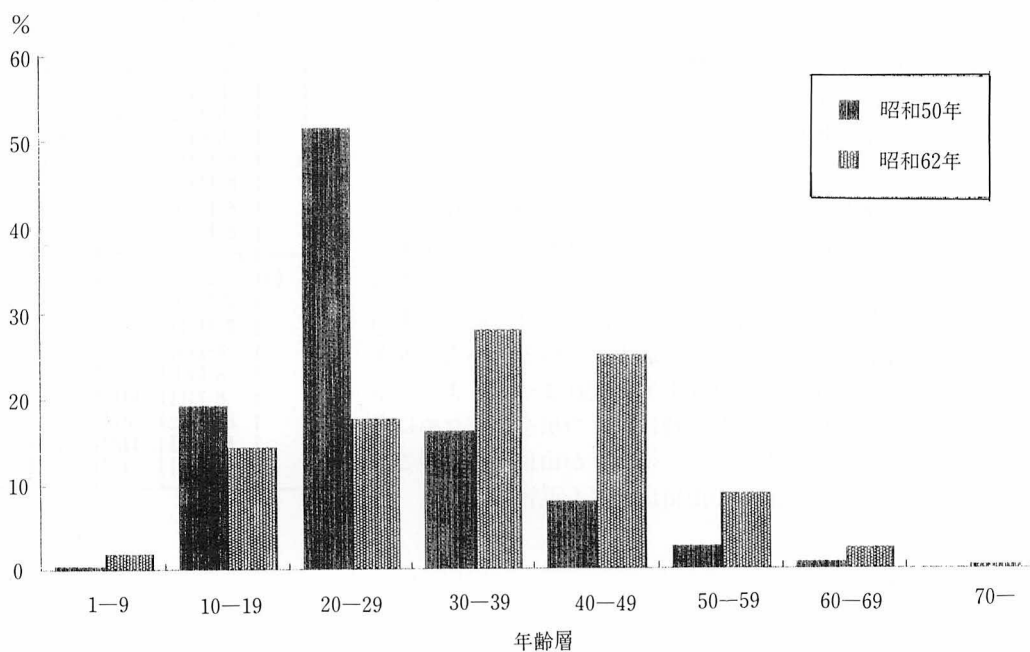
年度	月・日	曜	室堂	南竜	野営場
61	7-26	土	1187		
	7-27	日	896		
	7-29	火	823		
	7-30	水	860		
	8-1	金	846		
	8-2	土	1635	205	
	8-3	日	1084		
	8-14	木	817		
	8-15	金	981		
	8-16	土	773		
62	7-25	土		172	
	7-27	月	842		
	7-29	水		153	
	7-30	木	875		
	8-1	土	1148	250	
	8-2	日	1127		
	8-7	金	810		
	8-8	土	1327	161	
	8-10	月		247	
	8-13	木	808		
	8-14	金	1296	212	221
8-15	土	1130			
63	7-29	金	1000		
	7-30	土	1697	177	
	7-31	日	1232		226
	8-2	火			210
	8-6	土	1183		
	8-7	日	1047		
	8-13	土	844		217
	8-14	日	1279	203	284
	8-15	月	968		

## 中高年齢化、女性化の進む登山者

では、白山にはどのような人が登っているのでしょうか。昭和50年には登山者の71.2%が10代、20代の人々で占められていたのに対し、昭和62年には10代、20代の登山者は32.3%と半減しました。一方、30代は16.4%から28.2%、40代は8.0%から25.3%、50代では2.7%から9.0%、60、70代でも1.1%から3.2%とそれぞれ2～3倍に増加し、中高年齢化が進んでいることがわかります。これは、中高年齢者の余暇の増加とともに、健康や自然への志向の高まりを示しています。若者のあいだでは、以前にみられた、青少年団の団体登山、地域青少年の心身の鍛練のための登山は少なくなり、あえて汗を流してまで山に登る若者が少なくなっていると言えそうです。登山者の男女構成の変化をみると昭和50年には男7に対し女3だったのが、昭和62年には6対4と女性の割合が増加し、女性の進出が登山のほうでも進んでいるといえます。

登山の目的を調べてみるとそのベスト4は、自然観賞、山が好き、御来光、体力増進・健康管理で、それぞれの割合は、33%、22%、11%、10%でした。登山目的のうち割合の高い自然観賞について、その内訳を詳しくみると白山の雄大な景色と高山植物の観賞がそれぞれ54%と40%で、景色と高山植物を目的に白山登山をしていることがわかります。

宿泊者からのアンケートによると登山者の出身県のベスト3は、石川、福井、大阪で、地方別に見ると北陸、近畿、関東、北陸を除く中部地方ということになります。この傾向は昭和55年に調べた調査結果とほとんど変わりはありません。55年とのちがいは福井と、北陸をのぞく中部地方からの登山者の割合が若干増加したということです。



昭和50年と62年との登山者年齢層の比較

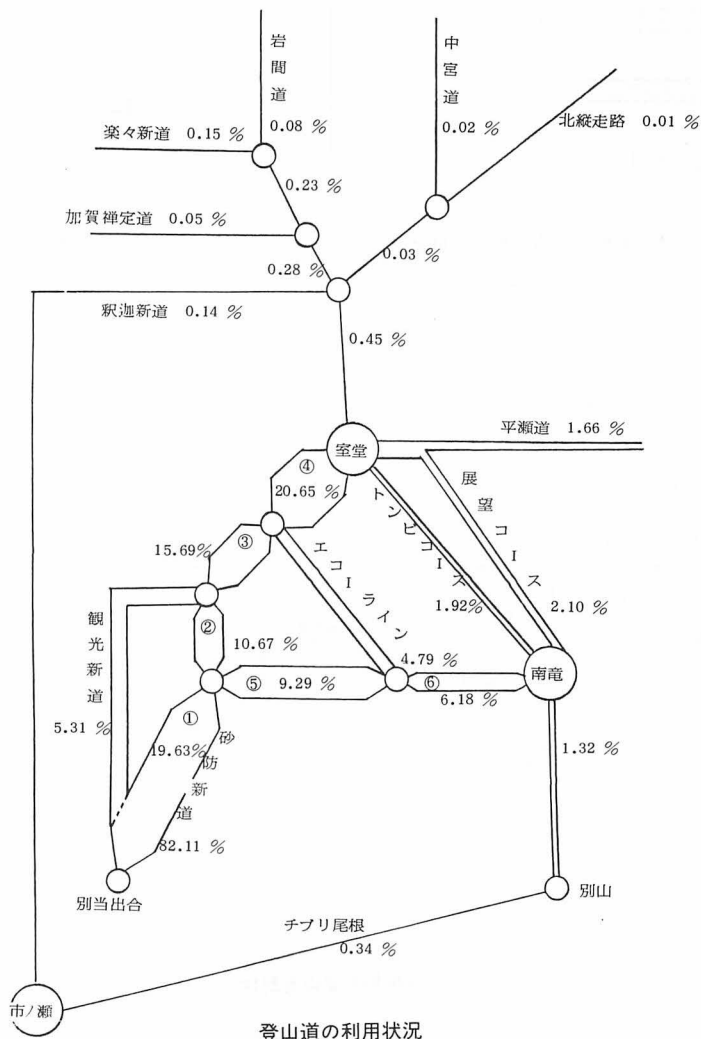




# 別当出合からの登山者は90%

白山への登山口は石川県側が別当出合、市ノ瀬、一里野、新岩間温泉、中宮温泉の5カ所で、ルートは砂防新道、観光新道、別山・市ノ瀬道、釈迦新道、加賀禅定道、岩間道、楽々新道、中宮道の9ルート、岐阜県側の登山口は大白川ダム、荻町（白山スーパー林道三方岩駐車場）、石徹白の3カ所で平瀬道と北縦走路、石徹白道の3ルート、それに福井県側の登山口は鳩ヶ湯からの鳩ヶ湯新道の1ルートで白山への登山口の合計は9カ所、13ルートということになります。

これらのうち、登山者数の多い順にみると登山口では何といてもトップは別当出合の89.5%で、2番目の大白川の5.9%、3番目の市ノ瀬の3.0%を大きく引き離しています。これをルート別にみると、砂防新道70.6%、観光新道18.9%、平瀬道5.9%、別山・市ノ瀬道2.5%になり、あとは1%以下ですが多い順に釈迦新道、楽々新



道、南縦走路、岩間道、加賀禪定道、中宮道、北縦走路でした。これらは明らかに山頂までの距離に反比例していて、登山者の多くが登る時間の短いコースを選んでいるといえるでしょう。

## ファミリー登山の山、白山

白山に登って行き交う人々を見ていると家族連れの登山者が実に多いことに驚かされます。事実、登山者グループの種類別でみると、家族グループ53.7%、友人グループ20.6%、職場12.4%と家族で登山している方が圧倒的に多いことが良くわかります。年齢構成のところで書き落しましたが9歳以下のこどもの割合も昭和62年は2.0%と昭和52年に比べると3倍に増えています。これは、白山が家族で登る山として、しかも小さな子供連れから高齢の人でも登れる高山であることを良く示しているといえます。自然保護センターでは、毎年夏に白山登山をして、高山植物や火山地形などを見る自然観察会を催していますが、これまで小学校1年生から山頂部へ引率してきました。途中で調子の悪くなったり、歩くのがつらくなるのはほとんどが、日頃運動不足のおかあさんたちで、子供は元気いっぱい室堂に到着します。そしてこのようなおかあさんの中には、翌年高山植物をゆっくりと観賞するために身体を鍛えてふたたび観察会に参加されるかたも何人かいらっしゃいます。別当出合から山頂までの登り5時間は、運動不足の方にはすこしつらいかもしれませんが、家族全員で力を合わせ、日頃の運動不足を実感し、健康への心がまえを新たにするには良い機会ではないかとおもいます。

夏休みの白山は、子供とともに家族が揃って登れる高山植物の豊富な、安全でファミリー登山に適した数少ない山と言えるでしょう。 (白山自然保護センター)





# 加賀禪定道に避難小屋完成

郷原吉宏

今年の7月、白山室堂と尾口村一里野を結ぶ加賀禪定道に避難小屋が完成しました。加賀禪定道は登り13時間、下り9時間と行程が長く、禪定道復活以来避難小屋の完成が待ち望まれていました。避難小屋の位置は禪定道の中央、奥長倉山直下50mの尾根上の、登山道から一段下がったところにあります。

晴れた日には遠く日本海が望め、夜には松任から小松にかけての加賀平野の街の灯が輝いて旅情を誘います。小屋は木造二階建てで、一階の入口右手には、雨水の自然流下を利用した水洗トイレがあります。さらに正面の扉を開くと、土間になっていて煮炊きはここですることになります。1階はこの土間を取り囲むようにコの字型になっていて、大人6人がゆったりとねることが出来ます。二階は8畳ほどの板の間で、窓の横には積雪期用の出入口があります。

水場は、小屋から10分程のところ、奥長倉山の頂上を越えて50m程下がった美女坂との鞍部の手前左手（丸石谷側）にあり、夏場でも僅かながら流水があります。

# 白山の 避難小屋



奥長倉避難小屋

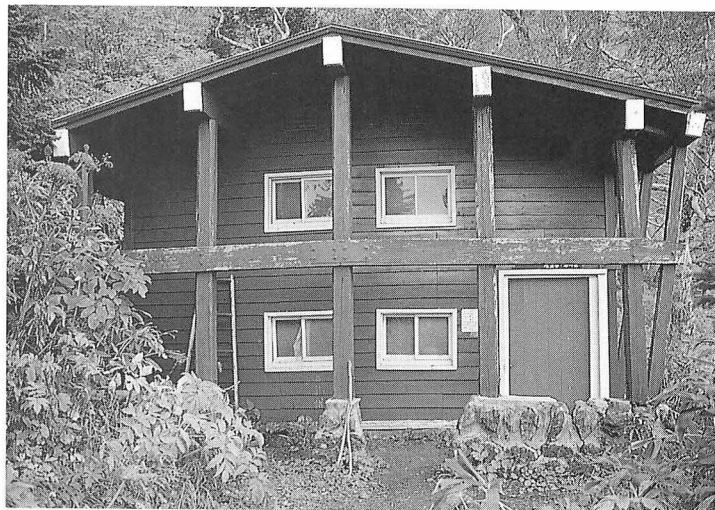


殿ヶ池避難小屋

材構造が採用されました。工事費が安価なうえ、積雪に耐える強度も十分あるといわれています。これまで避難小屋の便所は悪臭に悩まされていましたが、便所も快適に御利用いただくため、はじめて雨水を用いた水洗便所にしました。登山者一人一人が安全で快適な山旅ができるよう、互いに気をつけて避難小屋を御利用いただきたいとおもいます。

(白山自然保護センター)

奥長倉避難小屋の完成で、白山国立公園内には石川県が管理している避難小屋がこれで8棟になりました。従来の白山国立公園内の避難小屋のデザインは、半割丸太を使用し、ほとんどの小屋は切り妻の勾配屋根で周囲の風景にも良く調和しています。奥長倉避難小屋にははじめて構造材に集成材フレームを用いた、一般にはカナディアンと呼ばれる大規模断面集成



ゴマ平避難小屋

## 白峰村三ツ谷の 再興を願って——

林 七蔵さん

岩田 憲二



川上御前の前に坐る林七蔵さん

白峰村三ツ谷は、牛首川（手取川上流部）の支流である三ツ谷川沿いにあった集落で、市ノ瀬・赤岩と共にいわゆる『河内』と呼ばれていました。その名のとおり三ツ谷川は三本の谷（東俣谷・中俣谷・西俣谷）から成っていて、丁度その合流点付近の平坦地に人家が点在し、集落を形成していました。三ツ谷には、昭和9年の手取川大水害の直前に13戸、昭和30年頃で9戸、昭和36年の北美濃地震直前も9戸の住居がありました。しかし、同地震の後に急激に人口が

減少し、昭和38年のいわゆる三八豪雪の頃にはほとんど人がいなくなり廃村状態になりました。

ここで紹介する林 七蔵さん（61才）は三ツ谷で生まれ育ち、金沢に転出してからも、過疎で廃村となった故郷を（形は違っても）何とかして存続する道はないものかと模索しています。ここでは、林さんの三ツ谷にかける思い入れや同地の自然を紹介します。

### 二つの『山の家』

現在、林さんは三ツ谷に『山の家』ともいべき住居を2戸所有しています。一つは、牛首川との合流点から三ツ谷川を約300 m入った右岸にある、河内地方に唯一残っている茅葺き屋根の民家です。この家は約150年前の江戸時代末期に建てられたもので、元々は人の家の所有だったのが現在では林さんが持っています。建物自体はまだまだ大丈夫なのですが、毎年行う屋根の茅の葺きかえや冬の除雪の手間が大変だそうです。これまでに、旧住民の集りである『河内会』をここで開いたり、『お講』をしたこともあります。このように、三ツ谷に唯一残った茅葺き民家は、今は各地に

散らばってしまった旧住民の交流を深め結束を強める場として貴重な役割を果たしています。また、金沢の山岳会が白山山麓の臨時宿泊所として利用したこともあり、家の中に残っているイロリを使って、昔ながらの山村の暮らしの一端を味わったそうです。

林さんとしては、現在も残っている各種の民具なども展示して、かつての三ツ谷の生活を偲びかつ体験もできる施設として、周辺の川原や山林と合わせてこの家を再利用できればと考えています。林さんは自然に恵まれた三ツ谷で生まれ育っただけに、昨今ブームとなっている何でもかんでも開

発するというやり方には反対で、自然とのふれあいを大切にするという方向付けが必要だとしています。経済面や管理・運営上の難問があるとは思いますが、是非とも頑張してほしいものです。

林さんが所有するもう一つの山の家は、三ツ谷川上流地域にあるバンガロースタイルの現代風建物です。これは、春から秋にかけて自分の山の手入や畑仕事をしたり、また休養に訪れたりするために建てたものです。工芸家が本職の林さんにとって、生まれ故郷の豊かな自然の中で一時を過ごすのは、またとない気分転換となります。

ただ、近ごろ胸を痛めているのは、三ツ谷のブナ原生林が次々と大規模に伐採され

ていることです。三ツ谷の人達にとって、ブナはかつて自分達の生活を支えた木であり、現金収入の源となっていました。すなわち、三ツ谷ではブナを材料とするコシキと呼ばれる除雪器具が冬期間、奥山に小屋掛けをして製造され、県内の一大生産地となっていました。コシキを生産する際は一冬に必要な量のブナ原木を切るだけで、現在のように一気に伐採することはありませんでした。このコシキもスコップの登場とともに需要が落ち、戦後は全くの先細りとなりました。三ツ谷にはブナを使ったコシキ作りという歴史があるだけに、尚さらブナ原生林の現状に目が向くのだと思います。

## 川上御前社跡保存会結成

これまで紹介したように、林さんは故郷を離れた今でも色々な形で三ツ谷と関わり続けています。その代表的な活動が川上御前社跡保存会の結成です。川上御前社跡は、白山開山の祖とされる泰澄大使が白山からの帰路に立ち寄って、社を建立して女神像<sup>(\*)</sup>を祀ったと伝承される史跡で、三ツ谷から福井県に至る越前禅定道（廃道）の途中にあります。川上御前社跡保存会は、この社跡を後世まで末永く保存することを目的に旧河内住民有志を中心に昭和60年に結成されました。会長には、代々三ツ谷の世話役を努めてきたこともあって林さんが就任し、離村していった多くの旧住民も会員となっ

ています。毎年懇親会を開いて、社跡についての話し合いや清掃・手入れが行われています。

三ツ谷を含む河内は、現在では夏期に市ノ瀬に居住者がいるだけで、ほとんど廃村に近い状態になっているだけに、尚一層のこと住民同士のつながりが強いと思います。その結びつきを益々強め、故郷とのきずなを永く保たせるのが、川上御前社跡保存会だといえます。

(\*) 泰澄大師の自伝と伝えられる女神像の御本尊は現在、平泉寺白山神社社殿に祀られて、33年毎に公開される年期開帳の秘仏となっている。（白山自然保護センター）



川上御前の中に安置されている女神像。明治時代に寄進された。

## たより

今夏の白山は、積雪が多く、夏山のはじめのころは雪渓が多く残っていて登山には注意が必要でした。けれども、そのおかげでお花畑を2週間は長く楽しむことができました。7月には、登山者が行方不明になる遭難がありましたが、4日後には無事救出されました。

本文でも紹介しましたが、8月20日に第1回の石川県自然に親しむつどいが催され、400人の県民が白峰村緑の村に集り、動植物の観察や登山をしました。知事の言葉にあったように、当自然保護センターでもっと自然を知るための活動、知らせるための活動をしてゆきたいと思います。

総合保養地域整備法（リゾート法）の制定以来、日本各地でリゾート開発がブームになり、白山麓でも河内村のゴルフ場、スキー場開発、尾口村の三村山スキー場など開発の波がひたひたと白山の山頂を目指すように国立公園周辺にも押し寄せています。地元の新聞では白山にロープウェイ建設計画という記事も見られ、かねてから県道白山公園線を中飯場まで伸ばす計画などもあり、今後白山国立公園の保護と利用のあり方について十分な検討作業を進めていくつもりです。

## 目次

表紙	ホシガタケイソウ	1
	自然に親しむつどい開かれる	2
	ファミリー登山の山、白山 (白山の保護と利用に関する報告書から)	野崎英吉 6
	加賀禅定道に避難小屋完成	郷原吉宏 12
	山に生きる11 白峰村三ツ谷の再興を願って〈林 七蔵さん〉 岩田憲二	14

はくさん 第17巻第2号（通巻72号）

発行日 1989年10月15日  
発行者 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑  
〒920-23 Tel 07619-5-5321  
印刷所 株式会社 橋本 確文堂